# 「撰銭の世紀」をめぐる応答

大田　由紀夫

## はじめに

よく知られているように、一五世紀後半以降、日本をはじめとする東アジアの銭貨流通は動揺していくが、この現象をめぐって日本史・東洋史などの研究者の間でさまざまな議論が展開されてきた。近年、中島楽章は一四六〇年代から一五六〇年代にかけての時期を「撰銭の世紀」と捉え、その間の貨幣流通を考察する論考を発表した(1)。当該論文のなかでは、筆者の撰銭に関する議論を丁寧にフォローした上での批判もなされている。よって、筆者も中島の批判に対しては応答せねばならないと感じるとともに、これまでの自己の議論を見直す機会になると考え、本稿を草する次第である。

ところで、二〇一〇年と二〇一一年に筆者が発表した二つの旧稿は(2)、日頃考えていた見通しを大雑把に文章化したものであり、本来ならばもっと十分な論証を行わねばならない見解・論点も存在していたが、紙数・時間等の制約もあり、あのような形での発表になった。筆者の議論には説明不足や「具体的な論拠」の提示が不十分な箇所もあったことは率直に認めねばならない。本稿は旧稿の不備を少しでも解消すべく、その補説に努める。とはいえ、本稿で述べるものもなお概略的な内容に止まり、今後に解決を待つ問題も多い。こうした点については各位の寛恕を乞うとともに、本稿に対する批正を期待するものである。

以下、筆者の議論に対する中島の提示した批判点をめぐり、主としてなぜあのような議論を展開したのかという形で応答を試みていく。

## 一

さて、中世後期日本の貨幣動向をめぐり、旧稿（とりわけ旧稿Ⅱ）において最も主張したかったのは、次のような点であった。すなわち、一五世紀後半に惹起した撰銭現象は(3)、渡来銭流入状況の如何（渡来銭流入量の多寡や好銭・粗銭の流入状況）という次元から理解されるべきではなく、なによりも当時の東アジア域内交易の隆盛とそれに連動した共時的経済成長（＋各地域経済での流動性需要の高まり）という次元から理解すべきである、ということだった。列島各地の経済成長が既存の精銭供給を超える流動性需要を生み出し、粗悪銭の受容・流通を促すことで、撰銭を発生させた。よって、単に中国系私鋳銭の流入により撰銭が引き起こされたのではなくて、日本における流動性需要の高まりが粗悪銭（中国製および日本製）の流通をもたらし、その結果として撰銭現象が惹起した、と因果関係的に捉えたのである。

つまり、明朝中国から粗悪銭が大量流入したために中世日本で撰銭が惹起した、といった日明間における銭貨流動の変化が問題の核心なのではなく、広義の「唐物」（＝舶来品）流入の

増大にともなう経済成長・流動性需要の高まりこそが撰銭を惹起させた基底的要因であり（この「唐物」には、ひとまず好銭・悪銭あわせた渡来銭を含めずに議論を進める）、この点において旧稿は日明二国史的な撰銭理解と異なる認識を提示したのである。それゆえ、粗悪銭がおもに何処から流入したものであったのかは中心的問題とはいえず、それが中国製であれ日本製であれ、撰銭発生の基本理解には影響を与えない、と認識していた。繰り返せば、撰銭問題の核心は、当該期の東アジアにおける共時的経済成長にともなう流動性需要の高まりの方にあり、中国からの粗悪銭流入の有無はむしろ副次的な事柄に過ぎないのである。この主張は、主として筆者の旧説（大田一九九七・一九九八）や黒田明伸の議論（黒田二〇〇七）などに対する批判を意図していた。極端なことをいえば、たとえ渡来粗悪銭の流入がなくとも、朝鮮半島で悪布の流通が拡大していったように、日本国内の模鋳銭の氾濫によって撰銭が列島で発生することになったであろう、とさえ筆者は考えている。したがって、渡来銭と国内銭のどちらが日本の撰銭発生において重要な意味を持っていたのかという問題に関しては、どちらもそれなりに重要だったのではないかとの認識を、旧稿を執筆した時点ですでに持っていた。

なぜ上記のようなことを殊更に強調するのかといえば、この論点こそ中島の見解と筆者のそれとの最大の相違点であると考えるからである。中島は、海外からの銅銭供給の「途絶ないし急減」が中世日本での銭貨流通の減少をもたらし、さらにこれによって生じた不足分が「国内私鋳銭」により補充された結果、撰銭現象が発生した、と捉えている[4]。好銭流入の減少→粗悪銭による補填→撰銭発生、という「量」的解釈は、渡来粗悪銭か日本模鋳銭かという違いを除けば、大田一九九八で提示した撰銭発生の解釈と同一の論理であるといえる。だが、そのように理解することは難しいように現在の筆者には思われる。

なぜなら、大田二〇〇八の小結末尾（一六～一七頁）において提起した次のような問題を、中島の見解はうまく説明できないからである。すなわち、一四世紀後半の日本では、明の海禁による大規模な渡来銭流入の縮小があったにも拘わらず、その流動性不足を補填するために大量の粗悪銭（模鋳銭）が市場に出回って撰銭を発生させる、という事象は惹起しなかった（その代わりに銭遣いの縮小が起こった）のに、一五世紀後半には粗悪銭が広範に流通して撰銭を発生させたのはなぜかという疑問を、中島のような量的解釈は十全に説明してくれない。これに対して、一四世紀後半と一五世紀後半の違いをもたらした最大の要因は、東アジア域内交易の隆盛とそれに伴う共時的経済成長や流動性需要の高まりであるとしたのが、旧稿Ⅱである。そして、日本の撰銭発生を以上のように理解することで、明や日本、さらには渡来銭流通と関わりのない朝鮮半島における通貨変動は密接な関わりを持ちつつ惹起した歴史事象として捉えることがはじめて可能になる、と論じた。

なお、筆者が前記の主張をするにあたり、一五世紀後半に精粗をあわせた渡来銭流入の総量は必ずしも減っておらず、むしろ増加した可能性さえあるのではないか、と提起したのは（その論拠は後述）、当該期の日明間における唐物交易の拡大傾向

が、一般に減少したと考えられている渡来銭流入の領域でも、他の唐物と同じようにみられた可能性もあることを示す意図からであった。またこれに加え、たとえ渡来銭の流入増加があっても（ないしは増加する状況下でも）、撰銭が発生した可能性を示唆することによって、渡来銭流入の増減といった要因から撰銭が惹起するのではないこと、つまり撰銭現象は「量」の問題ではなく、「需要」の問題として理解すべきことを強調したかったからでもあった（と同時に、その需要は一国史的に理解すべきではないとも論じた）。だから、渡来銭が大量流入すれば銭遣いも安定的に維持されて動揺することはないなどとは筆者も考えてはおらず、まして単純に「日本国内での銭遣いの消長を、海外からの銅銭流入量の比例関数として解釈」（中島論文、四一頁）するつもりも全くない。これまで述べてきたことからもわかるように、渡来銭を受容していた側（日本）の流動性需要のあり方によっても、さらに好銭のみか、あるいは精粗雑多なものかといった渡来した銭貨の構成如何によっても、列島の銭遣いは影響を受けていたであろうと考える。

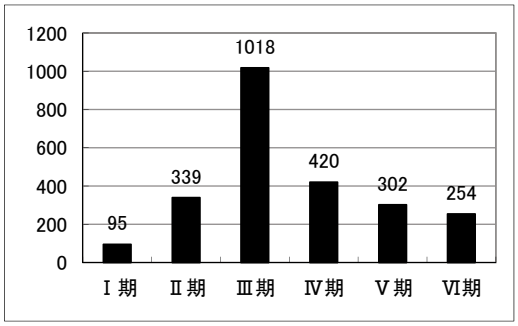
## 二

さきほど記した通り、渡来銭流入の増減や粗悪銭の出自が「副次的な」問題であるというだけで、この点に関して何らの認識を示さないのであれば、やはり無責任の謗りを免れないだろう。それゆえ、この問題に関する筆者の見通しを旧稿Ⅱに記したのだが（三〇～三一頁）、これに対しても中島から批判を受けている。そこで、現時点においてこの問題をどのように考えるのかについて改めて記しておく。まず結論からいえば、やはり中島の批判にも拘わらず、一五世紀後半において途絶・急減という事態は想定できず、たとえ減少していたとしても、それは大規模なものではなく、むしろ増加していた可能性さえあったのではないかと現在でも考えている[5]。そのように認識する論拠を以下に述べていこう。

なお、この問題に関してまず釈明せねばならないのは、渡来銭流入が一五世紀後半以降一貫して増加傾向ないし安定的であったとは、筆者も考えていないことである。増加の可能性があると考えたのは一五世紀後半に限ってのことであり、つづく一六世紀前半には流入が減少（と同時に日本の銭貨流通量も減少）しただろうと認識している。このことは、筆者に十分に議論できる準備・余裕がなかったこともあり、旧稿ではあまり明示的に論及できなかったが、ただそれでも旧稿Ⅱにおいて「一五世紀後半の流入量は、一五世紀前半よりも増加していた可能性さえある」という表現を用い（三〇頁）、流入増加の可能性が時期的に限定されるものであることを示唆しておいた。

こうした事柄を前提に、一五世紀後半に流入増加の可能性もあったと考える「具体的な論拠」として、現時点ではおもに四点ほどがあげられる。第一に、博多遺跡群における個別出土銭数の時期別変遷を参照すると（表1）、Ⅳ期とⅤ期では出土数は確かに減少しているが（四二〇→三〇二枚）、他方で永楽通宝を除く四つの代表的銭貨（元豊通宝・皇宋通宝・祥符元宝・洪武通宝）の時期別出土数の統計は（表2）、一四世紀前半と

表１　中世博多の時期別出土銭枚数（小畑・西山2007）



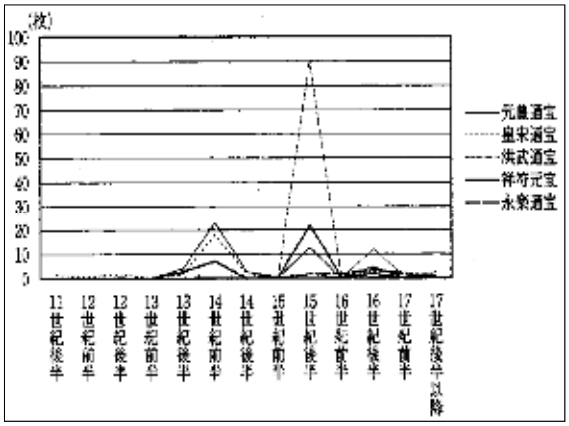

※Ⅰ期:11c末～12c前、Ⅱ期:12c後～13c前、Ⅲ期:13c後～14c前、Ⅳ期14c後～15c前、Ⅴ期:15c後～16c前、Ⅵ期:16c後～17c初

共に一五世紀後半が一つのピークをなしている（櫻木二〇〇七・二〇〇九）。櫻木晋一の作成した表２は、同じく博多遺跡における個別出土銭を整理した小畑弘己の作成した表１より細かい時期区分（半世紀か一世紀か）になっており、各期の違いがより鮮明になることもあって、櫻木のものを筆者はとりあえず利用した。

それというのも第二に、中世堺の時期別出土銭数における一五世紀以降の変遷が（嶋谷二〇〇六）、さきの博多遺跡群の四つの代表的銭貨のそれと類似した推移をみせている点に着目するからである（表３を参照）。とりわけ一五世紀後半の出土数は、前後の時期（一五世紀中頃・一六世紀前半）と異なり、いちじるしく増加していることが注目される。このようなデータは、一五世紀後半における日本への渡来銭流入の増加（そして一六世紀前半における減少）を示唆しているのではないか、と筆者の目には映る。

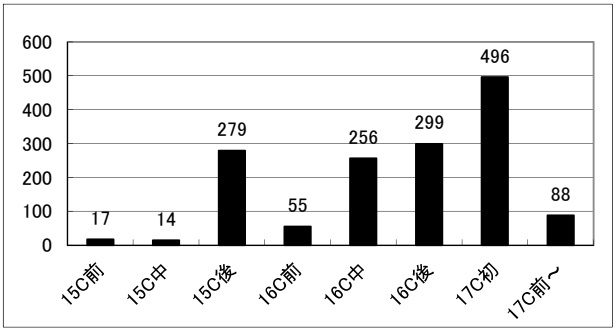
そして第三に、上記の事柄に加え、大田二〇〇八における積極的な評価とは異なり、博多遺跡群のⅣ期からⅤ期への出土枚数の減少を消極的に評価したいまひとつの理由として、息浜などのより新しい時代の遺跡から出土する割合の多いⅣ～Ⅵ期の出土枚数は、今後その数字が変動する可能性もあるとのこと（小畑・西山二〇〇七、一一三頁）、また一五世紀後半以降の博多はもはや唯一無二の対外交易の窓口とはいえなくなり、その比重を相対的に低下させていく点などを考慮したからである。以上のことを踏まえるなら、Ⅳ期とⅤ期の差異は、他の事例・データなども勘案しつつその重みを総合的に評価する必要があり、それらの差異を一五世紀後半の流入減少を示す証拠として絶対視する理由は必ずしもないだろう。博多遺跡群における個別出土銭枚数の時期別変遷の評価・意味付けは、いますこし当地の出土データの集成・整理の進展を待ってから（より明瞭な時期別変遷が確定した段階で）、あらためて検討する必要があるのではないかと考える。

表２　博多遺跡群個別出土銭数（50年以内）（櫻木2009）




第四は、日明間の銭価格差と輸入利益についてである。中島は、一五世紀後半～一六世紀前半の渡来銭輸入を阻害した要因

表３　中世堺の出土時期別枚数（嶋谷2006）




として、明側が日本側よりも銀建銭価が高い（精銭では二倍の）ため、コストが高くなって輸入利益を生まない状況を問題視し、この時期に渡来銭輸入が積極的に行われなかったと論じる（三四頁）。しかし、銀建銭価（ないし銀銭比価）といった銀建価格差だけで、当該期における輸入利益の有無を判断する中島の議論には無理がある。なぜなら、たとえ明朝中国の銀建銭価が日本より高くとも、利益を無視せずに渡来銭を輸入することは依然として可能だからである。

たとえば、日本においてある商品が銭一貫で購入でき、それが中国では銭五貫の値で売却できたなら、そこに四貫分の利益が生じ、この銭をそのまま持ち帰ると、銭五貫が日本市場へ供給されることになる（この場合、輸送コスト等を考慮してもなお大きな利益が残るだろう）。そのような当時の商品の候補として銅・硫黄などが想定できるが、なにが高利潤を生む商品であるかは時々の状況で異なったと思われるため一概にはいえないものの、銀銭比価（銀建銭価）に制約されず、少ない元手（＝銭）でより多くの利益（＝銭）を手にすることは可能だったであろう。また、中国内における銭と銀の転売などといった地域間の価格差を利用した営利活動でも、多額の銅銭を入手しうる機会が存在した[6]。こうした各種取引を通じて、渡来銭輸入は当時にあっても十分経済的に見合うものであったと考えられる。もちろん前記の仮定は物事を過度に単純化して語ったものだが、たとえ銀建銭価が日本側に不利な状況でも、利潤面からみて渡来銭輸入が依然として存続可能であったとする論拠にはなるだろう。

結局、当時の交易は銀銭比価に基づいて進められていた訳ではないので、中島のように日明間の銀建銭価の相違を理由に渡来銭輸入のメリットの有無を云々することはできない。日本側の人々には銭建での明との商品価格差こそ関心の的であっただろう。当時の明における銀建銭価の高さは、銀との交換によっては中国銭が日本へ流出しないことを言い得るだけである。そもそも一三～一四世紀の中国銭大量渡来期にあっても、日中間の銀建銭価はほぼ同一の水準だった。もしこの状況を中島の議論に当てはめるなら、日本への大量流入などは到底起り得ないことになるが、しかし史実としては、渡来銭輸入に有利な条件（金安など）が当時の日本側に存在していたため、大量の流入がみられたのである（以上の点については、小葉田一九六九、三一〇頁を参照のこと）。

問題は、彼我の銀銭比価（銭の銀建価格）の異同といった個別要素ではなく、当時の交易条件の全般的なあり様の如何にある。唐物入手のルートが何らかの形で確保され、中国において

日本よりも銭建てで高く売れる商品が存在すれば、渡来銭を通貨の基軸にした中世日本ではその輸入への動機が常にあった、と考えるのが妥当である（この点は明－琉球間の交易にも同様に当てはまる）。当時、銭が最も利益のあがる輸入品でなかったことは事実だが、かといって利潤率の高い生糸などの特定商品のみが舶載され、それ以外の財貨は輸入されないといった極端な状況にはなかったであろう。渡来銭は、周知のように船のバラストにもなり、かつ帰国後はそのまま通貨として使用できる重宝なものであり、それゆえ一五世紀後半においても依然として輸入メリットのある財貨の一つであったと考えられる。

## 三

つづいて、粗悪銭の問題について述べよう。一五世紀後半における渡来銭流入に関する筆者のこれまでの認識は、維持（大田一九九八。増加するとまでは考えていない）→減少（大田二〇〇八）→減少 or 維持 or 増加（旧稿Ⅱ）、と変遷するが、一貫して明朝中国からの粗悪銭のまとまった流入を想定していた。一五世紀後半における粗悪銭渡来を明示する文献史料が乏しいにも拘わらず、そのような想定をする論拠は、前述のように一定量の渡来銭流入があったと考え得る以上、好銭と共に粗悪銭も流入しただろうとみられるためである。現在、中世後期の日本列島においてかなりの規模で国内模鋳銭の鋳造・流通があったと推定されているが（桜井二〇〇七、三一六頁）、このような模鋳銭の広範囲な移出・受容が存在しているのなら、また大陸から中国銭もかなりの規模で渡来していたのなら、粗悪銭の移出・受容される範囲が列島内で完結する必然性も見出し難い。国内模鋳銭であれ、渡来粗悪銭であれ、個々の地域で入手可能なものを頓着せずに受容・行使したであろう。

また周知のように、博多遺跡群において一五世紀後半に増加する四つの代表的銭貨のうち、元豊銭・皇宋銭・祥符銭には鉛分の多い白色化した銭貨や鋳縮みしたものが確認でき、これらは大陸系私鋳銭ではないかとの指摘がある（櫻木二〇〇九、大庭二〇一一）。もっとも、大庭康時によれば、博多の出土銭の中で明確に模鋳銭・私鋳銭と判断できるものは少量に止まるという（大庭二〇一一、五三頁）。ただ、その数量の少なさが粗悪銭渡来説にとって一方的に不利な材料になるとはいえない。なぜなら、少量という点では国内模鋳銭も同様であって、そのまとまった流通を示す痕跡を博多遺跡群の出土資料から確認することはできないからである。そもそも中国の本銭（公鋳銭）と私鋳銭、国内模鋳銭と渡来粗悪銭などの区別・弁別はいまだ明瞭に行われていないのが現状であり、いまのところ渡来粗悪銭・国内模鋳銭の多寡を云々できる状況にはない。博多遺跡群において国内模鋳銭や渡来粗悪銭があまり検出されないことをどのように理解するかは今後の課題だが、ひとまず渡来粗悪銭の流入していた可能性の存在することが重要であろう。

また、小畑弘己は、博多の個別出土銭のうち「明銭はほとんどが本銭」と確かに記しているが（小畑・西山二〇〇七、一〇六頁）、しかし他方で、一五世紀後半に多数出土する洪武銭には本銭とは見做せない、小型のもの（所謂「筑前洪武」と

呼ばれる非本銭に類似したタイプ）が結構存在（数量的多寡は不明だが）しているともいわれている[7]。よって、この時期に属する明銭（とりわけ洪武銭）の素性をめぐる認識は考古学者の間でも必ずしも一致していないのが現状のようである。勿論、件の洪武銭群（また元豊銭・皇宋銭等）がたとえ本銭でなかったとしても、渡来系のものである保証は必ずしもないので、その存在をもって粗悪銭渡来の明証とすることには慎重でなければならないが、少なくともその可能性が十分にあるといえる。こうした事情なども考慮して、旧稿Ⅱの註三には、「これらの実体（公鋳銭か否か）・出自（中国系か日本系か）についてはさらなる検証を要し、その結果次第では当該期の渡来銭流入状況に関する本稿の認識も再考の必要が」（三三頁）ある旨を記したのである。いずれにせよ現時点では、一五世紀後半に属する博多の個別出土銭のなかに渡来粗悪銭の含まれている可能性がある以上、好銭とともに粗悪銭が渡来していたとする想定もそれなりに根拠があるのではなかろうか。

当時の日本側史料に記される「京銭」・「さかい銭」などが日本製・中国製のいずれであるのかという問題は、容易には決着のつかない難題である。中島論文（三九頁）や旧稿Ⅰ（一七六頁）が指摘するように、京銭は「今銭（きんせん）」と同意で、所謂「新銭」を意味する名称と考えられる[8]。これらが史料上では「日本新鋳料足」とも記されているため、これを国内模鋳銭とみる見解が現在優勢である。ただし、京銭が新銭と同義であるのなら、日本製の模鋳銭と共に、渡来系の粗悪銭がこの名称で呼ばれていたとしても不思議ではない。よく知られているように、明では粗悪銭が「新銭」と呼ばれていた（黒田二〇〇七など）。また、「さかい銭」は、出土資料などを踏まえて堺で製造された模鋳銭ともいわれているが、別の史料では「大とう（唐）」なる名称でも呼ばれており（「大内氏掟書」一六七条）、その文字面からすると中国製とみる余地も残されている（大田一九九八の註三三、四三～四四頁）。まして前述の通り、一五世紀後半に属する博多の個別出土銭の中には渡来系粗悪銭の存在している可能性があるため、「さかい銭」の出自を断定するにはまだ決め手に欠ける状況にある。

一つの事物に対して異なる素性を示す複数の名称が与えられるという現象は、「トウガラシ」・「サツマイモ」などのケースと非常に似通ったものがあるといえ（羽田二〇一三）、史料の記載からその出自を確定するのには、いますこし慎重であるべきように感じられる。もっとも、既述のように、京銭・さかい銭が日本製か中国製かという点にあまり拘泥する必要はない、とも筆者は考える。列島各地における悪銭流通は、域内の流動性を確保するために発生したが、各々の地域が置かれていた交易状況・経済条件の相違によって、日本製が主流を占めたり、逆に渡来系が優勢であったりと地域ごと時期ごとに多様であっただろうと推察されるからである。

いうまでもないが、史実を確定する際に史料上の記載がどれぐらいの重みを持ったものと評価できるのかは、まさにケース・バイ・ケースであり、各種の史資料・データや状況証拠なども含めた全体的布置の中で判断するしかない。よって、幕府の撰銭令では「日本新鋳料足」が言及されているだけであるか

ら、畿内では国内系模鋳銭に比べて渡来系粗悪銭の存在は重要でなかったとか（勿論その可能性はあるものの）、堺から琉球へ渡航する者の銅銭積載に関して言及する史料が存在するため[9]、当時堺から琉球へと銭が流出していた（中島論文、三四頁）、などと断片的な史料の記述から一義的に結論を導き出すのは危険である[10]。

要するに、全体状況の理解の如何によって、史料の評価・意味づけはどのようにも変わり得る。たとえば、悪銭を含めた渡来銭が日本に大量に流入した時期である一六世紀中葉の日本側史料に、日本から銭を持ち込んでいたこと窺わせる史料なども存在するが[11]、だからといって当時、大勢として日本から明へと銭が流入していたと考えることは到底できない。そして、一五世紀後半における全体状況の理解には、中島と筆者の間で小さからぬ相違が存在している以上、個々の史料記述の評価・意味づけも自ずと異なる。

以上のように、一五世紀後半に明からの渡来銭流入が少なからずみられ、粗悪銭も一定量渡来していたと想定することは十分に可能であるとともに、撰銭を惹起させる契機となった粗悪銭として、国内模鋳銭と共に渡来粗悪銭が重要な役割を果たしていたと筆者は認識している。また、旧稿でも渡来粗悪銭の流入・流通のみを撰銭発生の契機として重視した訳では決してない。今後さまざまな史資料から、渡来低銭の流入・流通が列島でほとんどみられないことが明白になるのであれば、それはそれで興味深いことである（撰銭発生の基本構図に対する筆者の認識は変わらないが）。けれども、現段階では一五世紀後半における渡来銭流入の途絶や粗悪銭渡来の過少さを裏付けるほどの十分な証拠が揃っているようには見受けられない、というのが筆者の認識である。

## 四

最後に、一六世紀前半の貨幣動向に関する見通しを若干述べておきたい。さきほど一五世紀後半とは異なり、一六世紀前半の渡来銭流入の減少を推定していると記したが、その理由は以下のようなものである。

周知のように、一六世紀前半には日本による東アジア域内との交易を支えていた各ルートで「三浦の乱」（一五一〇年）、「寧波の乱」（一五二三年）、ポルトガル勢力の東・東南アジア進出（一五一〇年代）といった出来事が次々と発生する。これら事象の発生が一六世紀前半に集中する背景には、当時の東アジア域内交易の隆盛と密接に関係していたと考えられる。まず一六世紀初頭、朝鮮政府が急速に拡大する日朝交易の財政的負担に耐えきれなくなり（日本からの持込品を政府が買取ったりしていたため）、日本との通商制限に乗り出すことで勃発したのが三浦の乱であり、これにより日朝交易は大幅に減少した（荒木二〇〇七）。

こうした朝鮮半島の動向に加え、日本の対外交易を悪化させたのが、一五二〇年前後の琉球における対明交易の衰退であり、そのため明と日本を結んだ唐物流入のパイプは縮小する。これに先立つ一五〇七年、琉球はそれまでの二年一貢から一年

一貢への貢期変更に成功し、往時には及ばないながらも、一時は東南アジア交易をさかんに展開していった。だが、何かにつけて寛容であった正徳帝から対外関係の統制に積極的な嘉靖帝への代替わりにともなって、一五二二年に再び二年一貢へ戻され、これ以降、琉球による対明進貢貿易・東南アジア交易はともに衰退していく[12]。さらに、琉球の交易状況の悪化を決定的なものにしたのが、ポルトガルの中国来航により引き起こされた紛争をキッカケに、明朝が対外交易の取締り（制限）を再強化したことと、一五二〇年代にポルトガル勢力と華商が福建・浙江沿海部で密貿易を展開するようになっていったことである（林一九八七）。さきの二年一貢という琉球の貢期変更も、ポルトガル来航に伴う混乱の余波と捉えられ、また東南アジアと中国沿海部のダイレクトな通商（密貿易）の展開は、琉球による中継貿易の重要性を次第に低下させていくとともに、華商による中国・琉球間の密貿易を縮小させることにも繋がり、琉球の対外交易はこの時期に大きな打撃を受けたと推測される。加えて、日本側の事情として、「寧波の乱」（この事件は対朝鮮交易の縮小による交易利権争いの激化も一因となって惹起したのだと考えられる）のため、遣明船貿易もしばらくは実施困難に陥る。かくて琉球との通交をほぼ唯一の恒常的な唐物入手ルートとしていた日本では、一五二〇年代前後に唐物全般の流入縮小が発生した可能性が高いのである。

こうした動向は、琉球や日本の銭貨流通の様相からも示唆される。一五三〇年代までには、琉球の銭貨流通は明からの渡来銭ではなく日本からの無文銭・模鋳銭などの流入に支えられるようになっていたことが確認できる[13]。中島論文で引用されている陳侃『使琉球録』の著名な史料[14]は（三四頁）、一六世紀前半における琉球による対明通商の縮小およびその日本への経済的従属化という歴史変化をへた後の状況を記録したものと捉えることができるように思われる。また、琉球への無文銭供給の有力候補地である泉州堺では、一六世紀前半に属する出土銭数が一五世紀後半に比較してかなり減少しており（前掲表2を参照）、博多遺跡群における出土銭の四つの代表的銭貨（元豊・皇宋・祥符・洪武各銭）の時期別出土数も前代（一五世紀後半）より減少している（櫻木二〇〇七）。そしてこれまた周知のように、一五一八年以降（畿内では一五一二年以降）、ほぼ四半世紀の間、日本列島では撰銭令の発布自体が確認できないことも[15]、こうした変化を反映したもの（＝撰銭現象の沈静化）と解せられる。ただ以上のように述べてきたものの、一六世紀前半における渡来銭流入の減少はまだ幾つかのデータから看取できる程度の見通しであるため、それがいつ頃より、どんな様相を呈して進行していくのかに関しては、その原因・背景も含めて大まかな見通しを持つのみであり、具体的にはよくわからないことが多い。

いずれにせよ、これら一連の事柄を踏まえるなら、一六世紀前半の日本では、朝鮮からの高麗物や琉球経由での唐物の流入縮小があったと推察される（また渡来銭流入も減少しただろう）。そしてこれと歩調を合わせるように、当時の列島経済も、手掛かりとなるデータもほとんどなくその傾向を明瞭に出来ない恨みはあるが、一五世紀後半以来の成長局面から停滞局面へ

一時的に転換していったようにみえる。たとえば、市場法発令の動向を参照すると、一五二〇年代前後にその発布がほとんど確認できないことなどから（佐々木一九九四、二四頁）、そのような見通しを有している。この頃、日本の対東アジア交易をめぐる環境が極度に悪化し、これが一つの有力な契機となって列島の経済活動が沈滞すると同時に、その流動性需要も低下していった。これが撰銭現象を沈静化させ、さらには撰銭令がその後しばらく出されなくなる理由ではないだろうか。

結局、渡来銭の流入が減少したから撰銭が沈静化したとか、粗悪銭の渡来が限られていたから悪銭の階層化が抑制された、といった量的解釈ではなく、列島における経済活動の沈滞にともなう流動性需要の低下という事態が悪銭の氾濫を抑制し、ひいては撰銭現象をも緩和させていった、と捉えられる。ここで重要なのは、渡来銭そのものよりも、それ以外の各種舶来品（唐物・高麗物など）の流入縮小であり、後世の事例（一五六〇・七〇年代における渡来銭の途絶）から判断すると、おそらく渡来銭流入の減少自体が列島経済に与えた負の影響はそれ程大きなものではなかっただろうと推測される。この時期の貨幣動向を理解するには、渡来銭流入の増減という「量」ではなく、やはり需要のあり方こそが問題にされねばならないと考える。もし流動性需要が高いまま、渡来銭流入の減少だけが発生したのならば、一六世紀後半以降の日本のように経済活動は沈滞せず、また国内模鋳銭の氾濫がもっと激化し、撰銭も沈静化することはなかったであろう。

なお、中島論文では、幕府の撰銭令が一五一二～四二年の間に新規発令されなかった背景として、畿内における銭貨流通の安定化を想定し（三九頁）、そうなった理由を、当時における精銭と悪銭の交換比率の安定（悪銭の階層化が一定の範囲内で抑制されている状態）に求めているように見受けられる（四二頁）[16]。だが、一四六〇年代頃から公的通交を通じた渡来銭流入が途絶し、精銭の稀少化と悪銭の増加が進行したと中島が想定しているような状況で、なぜ一五一〇・二〇年代頃になると精銭と悪銭の交換比率の安定状態が達成される（＝撰銭現象の沈静化）のかは、もっと明確な説明が与えられなければ説得力がない。もし一五世紀後半以降の混乱が次第に収束に向かい、やがて一定の安定状態に達するのだと理解しているのだとすれば、筆者にはそうなる理路がよく理解できない。普通に考えれば、追加供給のなくなった精銭は次第に減少してその市場価値を上昇させるとともに、時が経つにつれて流通界から引き上げられる傾向が強まり、またその消耗・磨滅化も進むため、精銭はむしろ益々稀少化し、他方で不足する精銭を補填するため粗悪銭〈＝国内模鋳銭〉が益々増加していく。その結果として、のちの時代になればなるほど、精銭と悪銭の交換比率の安定が達成されるのはより困難になる、と考えるのが自然だからである。にも拘わらず、一五一〇・二〇年代頃になって悪銭の階層化が一定の範囲内に収まるという事態は如何にして可能となるのか。一六世紀前半の貨幣動向に関する中島の議論は、いまひとつ釈然としないところがあるといわざるを得ない。

その後の一六世紀中葉以降の展開については、旧稿Ⅰで概略的に論じたような認識を持っている。すなわち、一六世紀中葉

における日本銀の登場により、日・明双方の商人が東シナ海を渡って頻繁に往来し、後期倭寇の跳梁を引き起こすと同時に、明との直接的通交が復活することによって、唐物と日本銀との大規模な交換が展開されることになる。このような日明交易の活況をうけ、以降、列島経済は飛躍的な経済成長を遂げ（一五五〇年代以降の市場法発布の頻繁化）、また急速に拡大した商品市場が「なんきん」と呼ばれる漳州製の私鋳粗悪銭をなど大量に飲み込んでいった結果、列島の銭貨流通は再び激しく動揺していく（撰銭令発布の再増加）、といった具合である（一八〇～八一頁）。ここでも鍵となるのは日明直接交易の拡大に伴う列島の流動性需要の高まりであり、このことが精粗雑多な渡来銭に対する需要を列島に喚起し、流通銭の階層化を加速していくとともに、撰銭を再び激化させていった基底要因であると考えられる。このような一六世紀中葉における雑多な渡来銭の大量流入が列島における銭遣いの安定的展開に寄与するはずはないが（中島論文、五〇頁）、筆者もまた銭遣いの安定などを想定してはいない。

ところで、中島が注目していた、一五世紀後半～一六世紀前半（一五三〇年代）に土地売券（不動産売買契約書）での銭遣いが安定的に維持されていた事象[17]をどう理解するのかという点に関して、筆者の見解は次の通りである。一六世紀初頭（一五一〇年代前後）まで銭遣いが維持されたのは、当該期にもまとまった量の渡来銭流入があったからと考えられる。もしこの時期に渡来銭の供給が本当に途絶・急減していたのなら、一四世紀後半（や一六世紀後半）の途絶期のように、銭遣いの後退・縮小がみられたであろう。銅銭の「非還流性」という黒田明伸説に対して懐疑的な中島はこうした見立てを支持しないかもしれないが、一五世紀後半の日本の貨幣動向などを踏まえるなら、やはり黒田説は依然として妥当性を有しているように思われる[18]。

ただし、畿内およびその周辺地域の売券において、一五三〇年代まで銭建取引が卓越していたのは、一六世紀前半には渡来銭の流入量・流通量ともにかなり減少したと筆者も考えているため、もちろん銅銭流通量の増加などによるものではないだろう。この点について明快に答えられるほど、筆者は当時の状況を十分に把握できていないが、当該現象は、一つには減少の仕方が一五世紀後半や一六世紀後半ほどにドラスティックなものでなかったこと、もう一つには中島論文も指摘する通り（四一頁）、この時期の土地売券には銭建での売価表示と実際の支払物とは異なるものが存在（＝銭遣いが縮小）している可能性もあることなどによって、渡来銭流入の途絶 → 銭建土地売券の激減という極端な事象が顕在化しなかったのではないか、と推測している。

ちなみに、畿内中央の隣接地域（近江・摂津・丹波・播磨）よりもその周辺地域（河内・和泉・紀伊などや中国・中部・北陸地方）で銭建売券の比率が高い理由は、論証抜きではあるが、おそらく次のような事情によるのではないかと考えられる。畿内中央から離れた周辺地域では年貢・公事などの代銭納への需要も高く、総じて貢租の支払手段や隔地間決済手段に使用する基準通貨としての、銭の効用に依存する度合いが高かったた

め、その地位がより安定的（＝銭貨が地域の諸経済活動に深く組み込まれている状態）であった。これに対して、中央に距離的に近いため、各種貢租の米納などもかなり一般的であった畿内中央の隣接地域では（浦長瀬二〇〇一、一四四・一五七頁）、銭への依存は相対的に低く、時々の状況に応じて銭建から米建へと比較的容易に転換可能であったのではないか、というものである。それゆえ、銭の活用が各種経済活動の円滑な遂行に不可欠となっていた地域は、渡来銭の流入・流通がかなり減少しても、やすやすとは銭建取引・基準通貨としての銭の使用を放棄せず、逆に近江・摂津・丹波・播磨などの地域は、米の貨幣的活用を柔軟に行えたため、銭建取引が卓越することはなかったのである。

しかし、畿内でも山城（京都）・大和（奈良）といった荘園領主の居住する中央部や都市的（商業的）要素の顕著な場所では、商取引や都市的消費生活の維持のため、銭の効用に対する需要が非常に高く、かつ豊富な銭ストックにも支えられ、銭建取引は根強く選好されつづけたと推察される（これら都市部の近郊もその影響圏に入っていただろう）。また、銭建・米建の売券が拮抗していた近江北東部であっても、山地で田地も乏しく、米などの必需品を他地域から購入するなど、商品流通への依存度が高かった菅浦では、近隣の他地域とは異なって、銭建取引が一五六〇年代まで卓越している点などからも、前記の仮説は裏付けられるように思われる。

銭への依存性に基づいて畿内各地を区分するなら、それが非常に高い京都などの中央部がまずあり、その周りに銭・米を柔軟に活用した中央部隣接地域（摂津・近江など）が存在し、さらにこの隣接地域よりも依存度の高い周辺地域（河内・和泉を含む）が位置する、といった三層構造を形成していたようにみえる。よって、中島の主張するような、米の商品化水準の高低と米建取引の多寡には直接的な相関性は存在していないといえる。もし両者の間に高い相関性があるなら、米の商品化が最も進んでいた山城や大和、また菅浦のような場所でこそ、米建取引が盛んになるはずだが、事実はそうではない。結局、個々の地域が諸経済活動を営む上で、どれくらい銭の存在に依存しているかの違いが、土地売券での銭建取引の多寡に影響していたのである。いずれにせよ、一六世紀前半における畿内の土地売券に記される支払手段の統計は、渡来銭流入・流通量の増減をストレートに反映するデータと見做すことはできない。

## おわりに

以上、筆者のかつての議論についても行論の都合上あえて再述しつつ、現時点において述べられる範囲で、中島の批判に対する筆者の応答を記してきた。冗長・雑駁な文章になっていること、また中島論文に対する誤読・曲解等のあることを危惧するが、ひとまず率直な考えを書き連ねたつもりである。いうまでもなく、旧稿や本稿で述べてきた見解は、管見の範囲で把握している史料・データに基づいた仮説であり、所詮は暫定的なものにすぎない。とりわけ一五世紀後半以降の粗悪銭の素性や渡来銭の流入状況については、今後の考古学をはじめとする他

の学問分野における研究の進展に待つところも多く、その結果如何によっては筆者の見解を改めねばならない場合も出てくるであろう。ただ、一五世紀後半における東アジアの共時的経済成長とそれに伴う流動性需要の高まりなどを背景にした撰銭の発生という見解は、渡来銭流入状況や粗悪銭の素性の如何に関わらず、なにがしかの問題提起にはなろうと判断し、旧稿を発表した次第である。

## 註

(1) 中島二〇一二。本稿では、以下「中島論文」と記す。なお、なお、本稿の論述は、中島論文の議論を前提にして進めるため、この論文も参照されたい。

(2) 大田二〇一〇ならびに大田二〇一一。以下、前者を「旧稿Ⅰ」、後者を「旧稿Ⅱ」と記し、両者をあわせて「旧稿」と呼ぶ。

(3) 「撰銭」とは、個々の流通銭を弁別して、ある銭についてはその授受を拒否したり、あるいは各種の流通銭の間に通用価値の格差を設けたりする行為である。撰銭発生の直接的契機は、一五世紀後半頃（中国は一四六〇年代頃、日本は一四八〇年代頃）から、良質の銅銭（中国では「好銭」と呼ばれ、日本では「精銭」と称された）とともに、粗悪銭（悪銭）が盛んに出回り、善悪あい混ざって様々な種類の銭貨が市場で流通するようになったことにある。「撰銭」は日本での呼称であり、明の史料では「揀銭」などと記されているが、本稿は「撰銭」の呼称で統一する。なお、撰銭現象に関する過去の議論の概略については、桜井二〇〇七などを参照。

(4) 中島論文、三二～三三頁。なお、中島は、密貿易・民間貿易による銭貨流通をほとんど評価せず、公的通交に伴う銅銭流入を重視しているので、その「途絶ないし急減」とは単なる減少・縮小ではなく、相当な激減を想定しているものと理解できる。

(5) その際、渡来銭流入のあり方は、好銭の減少と粗悪銭の増加という事態を想定している。

(6) 中島論文の註三五で述べる尋尊『大乗院寺社雑事記』永正二年（一五〇五）五月四日の条の史料解釈には疑問を感じる。まず原文を以下に引用しておこう。

於唐土銀代事。北都王城（北京）ニテ十文目ヲ一貫ニ取之、於南都（南京）二貫ニウル、於明州（寧波）三貫ニウル也。此三貫ニテ糸ヲ取テ、於日本取之ニ、理（＝利）在之。仮令一貫物ニ十文目替之事也、料足ハ不用之。

中島は、この引用史料を「北京において銀一両で銅銭千文の価値の商品を仕入れ、それを帰途に南京で二千文分、寧波で三千文分の価値で売り、その利益で生糸を仕入れて輸入するということを述べ」、「銅銭自体の比価について記しているのではない」とする（五六頁）。しかし、当該史料は、北京において銭一貫で銀一両（＝十文目・十匁）を買い、その銀を南京で売ると銭二貫を、寧波では銭三貫を

入手できることを記しているとやはり解釈すべきだろう。史料にみえる「十文目ヲ一貫ニ取之」の記述は、銀一両を銭一貫で入手、という意味と考えられる。ここの「一貫ニ取之」の「ニ」は「にて」、「取」は「入手する（＝買う）」の意で、後文の「此三貫ニテ糸ヲ取テ（この銭三貫で生糸を入手して）」と同類の表現である。また、「於唐土銀代事」という見出しの表現から判断しても、以後の文章が中国各地（「唐土」）における銀の銭建売却価格（「銀代」）を記していると見做せる。したがって、引用史料は一般に解釈されている通り、中国各地の銀銭比価を記したものといえる。末尾の「仮令（たとえば）」以下の文章は、もし（北京において）銭一貫相当の商品で銀一両と交換した場合、お金（銭＝「料足」）は全く使わないですむ、という意味のことを記していると解釈できる（この場合でも北京で購入するのは銀であり、その売却ではない）。よって、「料足ハ不用之」の文言も「仮令」以下の文章のみに係り、前段の文章すべてを含むとは考えない方がよい。

これに加え、尋尊が後日あらためて西忍の談話を筆録したものといわれる『唐船日記』の同内容を記す箇所には、「唐土ニテ銀ノウリカヒノ事」という見出しが付けられており（村井・須田二〇一〇、二五九頁）、この記事が中国における銀売買に関するものであることを明記している。ところが、中島の解釈では、本史料には銀の売却しか言及されていないこととなり（＝銀を買う過程が欠落する）、「銀ノウリカヒ」という見出しと齟齬する。以上のことから、当該史料は、銀一両あたりの売却で得られる中国各地の銭額を記し、「中国内における銭と銀の転売などといった地域間の価格差を利用した営利活動」の存在を示唆する貴重な記録といえる。

(7) 二〇〇九年一二月における櫻木晋一の教示。

(8) 同様の指摘は、滝沢一九九六にもみられる（九九頁）。

(9) 『大日本古文書　家わけ第十六　島津家文書之一』二七九号文書。

(10) ただし、中島もこの史料のみを根拠に一連の議論を展開している訳では毛頭ない。

(11) 大内氏『渡唐船法度条々』（「南海通紀」巻二〇〈『改定史籍集覧』第七冊、所収〉）における天文一六年（一五四七）の「銅銭至大唐不可隨身事」という条文。

(12) 瀬戸二〇〇九や岡本二〇一〇が明らかにした諸事実は、そのような趨勢を示唆していると考える。

(13) もっとも、琉球における明の渡来銭から日本の無文銭・模鋳銭への転換が具体的にいつ発生したのかについて知ることは、現状では困難である。この点については今後の課題とするほかないが、この事象もやはり一五二〇年前後の琉球による対明交易の衰退にともなうものだったのではないかとの見通しを持っている。

(14) 陳侃『使琉球録』羣書質異（嘉靖一三年〈一五三四〉頃）
通国貿易、惟用日本所鋳銅銭。薄小無文、毎十折一、毎貫折百、殆如宋季之鵝眼綖貫銭也。

(15) 日本銀行調査局一九七二、二八〇頁には、室町幕府・諸

大名による撰銭令の発布年次が簡明な表にまとめられている。

(16) ただし、正確にいえば、中島論文はその理由を明言していないので、本文の理由説明は筆者の推量によって補い記したものである。

(17) 中島の議論は、浦長瀬二〇〇一（第四章「一六世紀～一七世紀初期西日本各地における取引手段の変化」）の統計に基づいている。以下、同書第二章（京都）・第三章（近江菅浦）の統計データなども加味し、本稿では議論を進める。なお、浦長瀬二〇〇一、第二章～第四章の統計にもとづき、一四五〇年代～一五三〇年代の西日本各地の土地売券における代価の貨幣表示を整理すれば、以下のようになる（中島論文の表記に倣い、銭建件数／米建件数で記す）。

京都（一六四／〇）、大和（六六／三）、丹波（八二／二四）、近江北東部（六四／六一）、近江菅浦（六六／二）、近江南東部（五四／二〇）、摂津（五〇／三一）、播磨（九／九）、河内（二四／四）、和泉（三一四／三）、紀伊北中部（七三／一）、紀伊那智（五一五／二）、伊勢（二四四／〇）、若狭（六二／三）、越前（一〇一／二）、美濃（六七／〇）。

(18) 銅銭の「非還流性」とは、銅銭は一旦各地域に投下されるとそのまま域内に滞留し、またその回収に非常なコストがかかるため、市場には再登場しにくいという性質のことである。黒田によれば、銅銭の流通を維持するには、絶えずその市場の取引規模に見合った量の追加供給が必要であった。黒田一九九四、二八頁以降ならびに黒田二〇一四、序章を参照のこと。

## 【参考文献】


荒木和憲二〇〇七　『中世対馬宗氏領国と朝鮮』山川出版社

浦長瀬隆二〇〇一　『中近世日本貨幣流通史』勁草書房

大田由紀夫一九九七　「一五・一六世紀中国における銭貨流通」『名古屋大学東洋史研究報告』二一

――一九九八　「一五・一六世紀東アジアにおける銭貨流通」『鹿児島大学人文学科論集』四八

――二〇〇八　「一四・一五世紀の渡来銭流入」『歴史の理論と教育』一二八

――二〇一〇　「渡来銭と中世の経済」荒野泰典ほか編『日本の対外関係 四』吉川弘文館、所収

――二〇一一　「一五～一六世紀の東アジア経済と貨幣流通」『新しい歴史学のために』二七九

大庭康時二〇一一　「中世後半の出土銭貨を中心とした博多遺跡群の考古学的成果」『博多研究会誌二〇周年記念特別号』博多研究会

岡本弘道二〇一〇　『琉球王国海上交渉史研究』榕樹書林

小畑弘己・西山絵里子二〇〇七　「中世博多における出土銭貨と流通」『市史研究ふくおか』二

小葉田淳一九六九　『改訂増補　日本貨幣流通史』刀江書院

黒田明伸一九九四　『中華帝国の構造と世界経済』名古屋大学

出版会
――二〇〇七　「東アジア貨幣史の中の中世後期日本」鈴木公雄編『貨幣の地域史』岩波書店、所収
――二〇一四　『増補版 貨幣システムの世界史』岩波書店
桜井英治二〇〇七　「銭貨のダイナミズム」鈴木公雄編『貨幣の地域史』岩波書店、所収
櫻木晋一二〇〇七　「出土銭貨からみた中世貨幣流通」鈴木公雄編『貨幣の地域史』岩波書店、所収
――二〇〇九　『貨幣考古学序説』慶應義塾大学出版会
佐々木銀弥一九九四　「中世市場法の変遷と特質」『日本中世の都市と法』吉川弘文館、所収
嶋谷和彦二〇〇六　「中世都市・堺における銭貨の出土状況」『歴史空間における銭貨の出土状況』第一三回出土銭貨研究会大会報告要旨、所収
瀬戸哲也二〇〇九　「琉球から見る中世後期の流通」『中世後期の流通を考える 資料集』広島県立歴史博物館ほか、所収
滝沢武雄一九九六　『日本の貨幣の歴史』吉川弘文館
日本銀行調査局一九七二　『図録　日本の貨幣 一』東洋経済新報社
中島楽章二〇一二　「撰銭の世紀―一四六〇～一五六〇年代の東アジア銭貨流通―」『史学研究』二七七号
羽田　正二〇一三　「プロローグ 海から見た歴史へのいざない」『東アジア海域に漕ぎだす1 海から見た歴史』東京大学出版会、所収
村井章介一九九三　『中世倭人伝』岩波書店
村井章介・須田牧子二〇一〇　『笑雲入明記』〈東洋文庫七九八〉、平凡社
林　仁川一九八七　『明末清初私人海上貿易』華東師範大学出版社